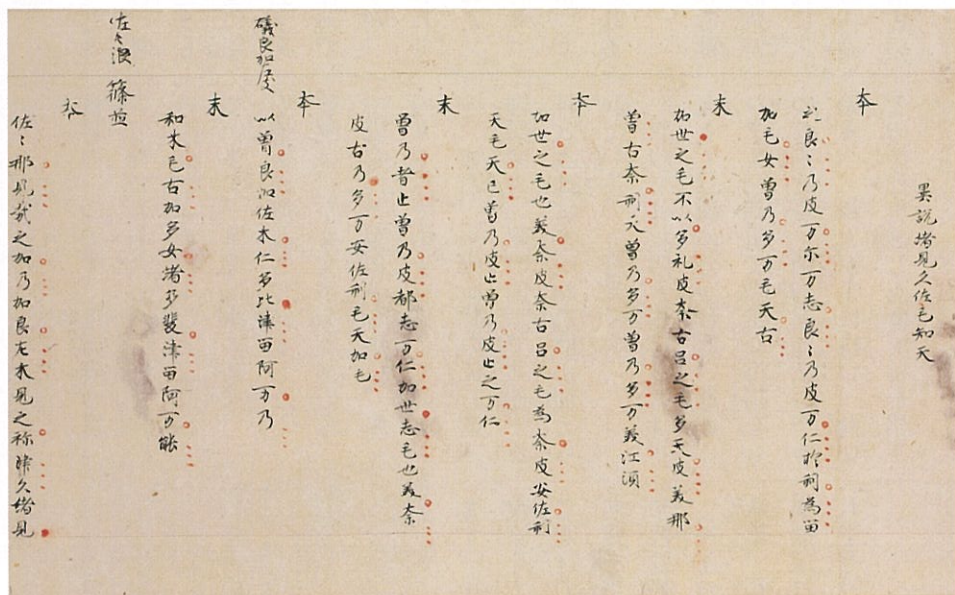


やまとの名品 天理図書館



かぐら うた しげたねほん
神楽歌 重種本 (重要文化財)

平安末期写 1軸
縦28.5cm 横6.22m

はるか昔より、神が宿りし聖域に、人々は歌や舞を捧げ、神人一体の宴を織りなしてきました。日本神話では、天岩屋に籠られた天照大神を外界へ引き出すために、天鈿女命がその前で踊り舞ったと伝えていますが、これが神楽の始まりと言われてます。神楽は、神を祀るために奏する歌舞の神事芸能です。宮中に伝承される「御神楽」と、一般神社など民間で行われる「里神楽」に分かれます。

本譜は、宮中で奉納される神楽歌の譜です。神楽歌の形式が整えられたのは、平安時代に入ってからですが、現存する古譜の中でも、書写年代が最も古い

資料の一つです。近衛府の官人で神楽の名人、八俣部重種の注進で「重種本」とよばれています。雅楽伝承の楽家、安倍家が所蔵していました。歌詞は、かな文字を漢字の音で表した万葉仮名を用い、朱の丸や点で拍子を付しています。また、平安時代の流行歌、催馬楽の「紀の国」で共通する神と真珠にまつわる歌が加えられているのも特徴です。

収められた四十八首の歌は、大きく三種に分かれ歌い進められます。荘重で独特な抑揚をもつて唱える「阿知女作法」から始まり、舞人が手に持つ、柗などの憑代を詠じた歌で神を招き

ます。民謡的で遊宴な趣の歌は、夜深くまで神を楽しませ、やがて明けの明星を見る頃、神との名残を惜しみ、神を送る歌で神楽歌は終宴を迎えます。

神々の宴に、和琴、神楽笛、箏、笏拍子の調べも伴い、神楽歌は日本歌謡の最も古いかたちを今日に伝えていきます。

(天理図書館 末代美保)

